



図2 金試薬3種類に対する陽性者数
偽陰性を避けるために複数の試薬を使用することが大切である。

う病識がはっきりし、日常生活でアレルゲンを避ける習慣が身に付き、再発防止に効果が期待できるからである。判定時期については金試薬では4～5日目に初めて紅斑が現れ、5～6日目には浮腫を伴うといった出現の仕方をする場合が多いので、1週間後に経過を聞いた上で判定することにしてている。1週間後までに消失した紅斑等がある場合には臨床経過を考慮した上で、必要があれば48時間貼付による再検査を行うこともある。

3. 金属アレルギーの人がピアスを楽しむには炎症を起こしている孔からピアスを抜いてしまうと膿が排出されなくなり、膿瘍や肉芽腫を作ることもある。筆者はシリコンリングを使ってピアス孔を温存する治療法⁹⁾を考案し、この治療と並行してパッチテストで金属アレルギーの有無も確認することにしてている。この治療によって孔が上皮化した後は、アレルギーがない場合には通常通りにピアスを使用できるし、アレルギーがあった場合でもすべての金属に陽性であるわけでもないで、陽性となった金属素材を避けてピアスを選ぶように指導することができる。

すでに診療したピアス皮膚炎は1万例を超え

るが、18金の指輪でかぶれるという例は数例しか経験していない。金はちょっとした汗ぐらいではイオン化せず、また、したとしても健全な皮膚バリアを通過できないためであろう。そのような人であれば上皮化した孔に短時間だけ18金ピアスを着けてもかぶれることはないはずである。もちろん上皮化したばかりの時期にアレルゲンを接触させてよいわけではないが、社会生活上、一時的に金のピアスをしたいこともある。どうしてもアレルゲン素材を使用したい場合には、ピアスに塗布してプラスチックの透明皮膜を作って直接金属を皮膚に接触させないコート剤が市販されていて有用である。

4. これからピアスをする人が金属アレルギーにならないためには

国内で使用されているファーストピアスの多くは医療用ステンレスの表面を純金で処理したもので、有効軸長が6ミリのもの(スタンダードタイプ)と8ミリのもの(ロングタイプ)がある。たとえば7ミリの厚さの耳垂にスタンダードタイプを着ければ圧迫による腫脹が起きて創傷治癒を妨げ、感染の機会も増え上皮化の完了が遅れ、金属アレルギーに陥る危険が高くなる。